

哀歌1章17節「本当の慰め」

1A 汚れされた女

1B 培われた尊厳

2B 自ら捨てた貞潔

2A 破壊にある神の愛

1B 涙の後の平安

2B 父の愛にある成熟

3A 身代わりに受けられた傷

1B 損なわれた御姿

2B 避け所

本文

私たちの聖書通読の学びは、今日から哀歌に入ります。今日の午後に 1-2 章を学び、それから来週に 3-5 章を学ぶ予定です。今朝は、哀歌 1 章 17 節を読みたいと思います。「シオンが手を差し出しても、これを慰める者はない。主は仇に命じて、四方からヤコブを攻めさせた。エルサレムは彼らの間で、汚らわしいものとなった。」

哀歌は、哀悼の歌ですが、エレミヤが破壊されたエルサレムを眺めながら、涙も尽きるほど泣いてうたった歌であります。神殿の丘の北に、「エレミヤの洞穴」と呼ばれる穴があります。イエス様が十字架に付けられたと言われる、ゴルゴダの丘のちょうど東隣にあります。¹ 言い伝えによれば、エレミヤはゼデキヤの時代にここに幽閉されており、バビロンがエルサレムを陥落させるまでここにいたということです。ここからだ、神殿の丘が正面に見えます



し、バビロンは北から攻めてその中に入っていった様子を全て見ることができます。エレミヤは、エルサレムの都が侵され、汚されていく様子をそのまま歌にしていきました。その悲しみは、一滴の涙も出てこないぐらいのもので、全て泣き尽くしたと言われています。

1A 汚れされた女

哀歌では、エルサレムの都を一人の女としてエレミヤは描いています。1 章 1 節には、「ああ、人

¹ <http://wikimapia.org/7555725/Jeremiah-s-Grotto>

の群がっていたこの町は、ひとり寂しくすわっている。国々の中で大いなる者であったのに、やもめのようになった。諸州のうちの女王は、苦役に服した。」とあります。諸州のうちの女王というのは、ダビデとソロモン時代の王国です。その時の栄華を女王と呼んでいるのですが、今は、廃墟となり、ユダヤ人がバビロンに捕え移された後のエルサレムであり、それを「やもめ」と呼んでいるのです。エルサレムを「彼女」と呼び続けています。

そして、彼女が罪を犯し続けて、今や敵に踏み虹られている姿を、売春婦となり、しかも売春もできなくなっているほど卑しめられている女として描いています。1章 8-9節を読みます。「エルサレムは罪に罪を重ねて、汚らしいものとなった。彼女を尊んだ者たちもみな、その裸を見て、これを卑しめる。彼女もうめいたじろいだ。彼女の汚れはすそにまでついている。彼女は自分の末路を思わなかった。それで、驚くほど落ちぶれて、だれも慰める者がいない。「主よ。私の悩みを顧みてください。敵は勝ち誇っています。」まるで、レ・ミゼラブルのファンティーヌのような惨めさです。小説また映画に触れた方はご存知だと思いますが、工場で解雇された彼女が、隠し娘の養育費のために働くも、お金が足りず、自分の大事な歯と美しい長い髪も売ってお金を作りました。しかし、何もかも売ってしまった後もお金が足りないので、ついに売春に走ってしまった、という話です。映画で見ると、その陰惨な売春街の舞台には目を覆いたくなりました。

1B 培われた尊厳

けれども、エルサレムはもっと酷いです。かつて女王であったのに、しかもそれは、主が捨てられていた女の子の赤ん坊を拾って、その子を育てて、大人の女性ににまで育て、契りを結び、それで女王の座にしたのだと、神はエゼキエルを通して語っておられます(16章)。ところが、女王になった時にその美しさに自ら溺れて、それで自分の名声を利用して、姦淫を行なっていったことが書かれています。それが、外国の神々に仕え始めたイスラエルとユダのことを示しています。そして、どんどん自分の身を壊していくも、自分を育ててくれた初めの夫、つまり神ご自身のところに戻ろうとしませんでした。そして、エジプト人の男が通りかかり、彼と姦淫をします。次に、アッシリヤ人の男が通りかかり、姦淫します。さらに、カルデヤ人、バビロンの男が通りかかり、姦淫するのです。これはもちろん、弱くなっていったイスラエルとユダが、主との親しい関係から離れているために、エジプトに頼り、アッシリヤにも頼り、バビロンにも頼っていった姿を描いています。

そして悲惨なことが書いてあります。売春ではなく、なんと買春をしているというのです。男と通じるために、男が金を払うのではなく、女の方が贈り物をして姦淫をしていると言います。これは、頼りにならないはずなのに、エジプトに守ってもらおうべく贈り物をし、アッシリヤが守ってくれるはずがないのに守ってくれるようにお願い、そしてバビロンにも媚びて、守ってもらおうとしたことを意味します。こうやって、結局、それらの男から嫌われて捨てられる結果をエゼキエル 16章は描いています。「16:35-37 それゆえ、遊女よ、主のことばを聞け。神である主はこう仰せられる。あなたは、愛人たちや、忌みきらうべき偶像と姦淫をして、自分の恥ずかしい所を見せ、自分の裸をあらわにし、それらに自分の子をささげて血を流したため、それゆえ、見よ、わたしは今、あなたが戯れたす

すべての愛人たちや、あなたが恋した者や、憎んだ者をすべて寄せ集め、彼らを四方から集めて、あなたの裸を彼らにさらけ出し、彼らにあなたの裸をすっかり見せよう。」自分が貫通していたそれらの男たちから、一斉に辱められたということです。

2B 自ら捨てた貞潔

私たちは、「自分が何をするか？」ということに注目を持ちやすいですが、主ご自身がいつも、ご自身と親しい交わりを持つことを喜んでおられます。活動や行動よりも、関係を神は大切にしておられます。エペソの教会に対してイエス様は、「あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。」と言われてほめられました。しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。(黙示 2:4)」と言われました。主の愛の中にいることが大事なんですね。

雅歌においては、ソロモンが数多くの妻や側女のいる中で、一人のシュラムの女を愛して、結婚して、その夫婦関係を育む姿が描かれています。本当に繊細なことについて気を使い、彼女を守り、彼女をほめ、それで彼女は羞恥心を克服して、自尊心が培われています。そのように、愛によって養いを受けて、ソロモンという男に対する一途な思いを強めていきますが、それは神とイスラエルの関係でもあり、またキリストと教会の関係とすることもできるでしょう。シュラムの女は、ソロモンとだけの時間を、ぶどう畑やその他の果実を育てている畑に喩えています。そこで、「ぶどうの木が芽を出したか、花が咲いたか、ざくろの花が咲いたかどうかを見て、そこで私の愛をあなたにささげましょう。(7:12)」と言っています。芽が出て、花が咲いて、それで実を楽しむには、養いと愛、それから時を待つところの忍耐が必要です。同じように、私たちは神によって養われ、そこから聖霊による芽生え、花、そして実を結ばせることができます。

2A 破壊にある神の愛

本文に、「**シオンが手を差し出しても、これを慰める者はない。**」とあります。この「慰める者がいない」という言葉が、哀歌には何度となく出てきます。これは、自分がこれまで支えとしていた人から完全に見放され、切り離されてしまった状態を話しています。自分が独りになってしまったこと、これではもう生きられないと思って、その空洞を埋めるようにあえぐのですが、誰もいないという切なさであります。それで、泣いて泣いて、泣き続けて、孤独の中で喘いでいます。

1B 涙の後の平安

しかし、次回学びますが、その涙と嘆きの中で、エレミヤはエルサレムの人々を代表して、こう言います。「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。(3:22)」いろいろ支えにしていたものが取られて、それで慰めがなくて嘆いている中で、ふと、自分たちが滅び失せていないことに気づきました。そこに神の恵みがあり、尽きぬ憐れみがあります。

主が望まれているのは、このような真実な平安です。これはある意味、母のような優しさ、養いは私たちに必要だけれども、人格形成のためには父のような厳しさが必要ということです。自分の

中にある自己中心性、汚れ、悩み、これらのものが人格の深いところで取り除かれて、そして主ご自身に会うことが必要です。

パウロが、主から取り扱いを受けたことがありました。肉体の棘が与えられました。サタンからのものだったのですが、主に三回取り除いてほしいと願いました。ちょうど、エルサレムの娘のように、慰めがほしいと願っているのと同じです。ところが、主は彼の願いとは違う形で、その願いを聞いてくださったのです。「2コリント 12:9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」自分が取り除いてほしいと思っているその棘の中にこそ、むしろ主の恵みが完全に現われている、ということ。そしてその弱さにある時に、強くなれるのだということです。

ですから、そこには涙があります。どうしてこんなことが起こるのか？という疑問や嘆き、苦しみがあります。けれども、その涙を通してこそ、真実に頼るべき方が見えます。主ご自身によって満たされること、主こそが自分の頼るべき方であることを知ります。詩篇朗読で読んだように、「主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。(詩篇 4:8)」なのです。主こそが自分を安らかにして下さるところに、主が無理やりにも導かれるのです。それが父のような愛です。息子がどんなにジタバタしようとも、それでも泣き止むまで待ってあげ、そして思い直すところまで指導するのです。

そのような真実な平安を知る必要があります。私自身は、自分自身の救いがそのようなものでした。高校生活で、自分が何のために勉強しているのかが分からなくなりました。それで鬱的になったのですが、神の憐れみで大学に入学できました。そして自分はやり直すのだと思ったのです。中学校の時は、部活にも勉強にも励んでいましたが、高校でやり気をなくしていました。それでやり直そうと思って、大学ではあるサークルに入りました。英語の討論会をするサークルですが、そこで、他の仲間よりも猛烈に準備しました。ところが大会の時に全敗しました。全敗しただけでなく、パートナーから怒られて、嫌われてしまいました。

なぜ？とさっぱり分からなくなりました。自分は一生懸命、しっかりやってきたつもりなのに、なんで誠実にやっていることがこのように人に嫌がれたりするのか？と思いました。もし、その時に人に相談したら、誰かが「みんなに好かれるのはできないわよ。」「一生懸命やったんだから、いいかない。」と慰めをかけられたかもしれません。けれども、幸いにも、私は誰にも相談しませんでした。それは、女性的な慰め、母親的な慰めであるかもしれないですが、自分の人格の深いところで神に出会うのに、必要なことだったのです。その辛い出来事があって、一・二か月後に、実家の近くにある教会のクリスマス礼拝に出席し、その後で自分の部屋で、「生まれてこの方、あなたを無視して生きていました。」と祈ったのです。その時に、父の愛が流れました。今まで、自分の良いところを見せることで、価値を見いだしていましたが、自分の最も醜い部分も含めて、すべてを包

んで受け入れてくださった神の臨在を知りました。

主は、父と息子の間にあるような関係の中に私たちを導き、そこにある真実な平和を抱かせたいと願っています。「ヘブル 12:10-11 なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」

2B 父の愛にある成熟

使徒パウロは、新しく信じたテサロニケの人々に対して、どのように接したかを説明している箇所があります。「1テサロニケ 2:7-8 それどころか、あなたがたの間で、母がその子どもたちを養育するように、優しくふるまいました。このようにあなたがたを思う心から、ただ神の福音だけではなく、私たち自身のいのちまでも、喜んであなたがたに与えたいと思ったのです。なぜなら、あなたがたは私たちの愛する者となったからです。」本当に、母親のような優しさですね。母であれば、息子や娘のために何でもやってあげようと思います。しかし、それだけでは霊的に成長できません。父のような愛が必要なのです。そこで彼は父のようにも接したことを話しています。「1テサロニケ 2:11-12 また、ご承知のとおり、私たちは父がその子どもに対してするように、あなたがたひとりひとりに、ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。」

父の愛には、「何も言わない愛、何もしない愛」というものもあります。何かをしてしまうのが私たちの人情ですが、何もしないことによって、その人が我に戻ることができるようにする。何かにこれまで頼っていたものが、頼れないのだ、それは自分を裏切るのだということを知るようにする、ということであります。私たちは、そのような父に、あの放蕩息子の父がいることを思います。父が、悔い改めた息子を、走り寄って抱いて、口づけしたところに愛があると思うかもしれませんが、実は彼の愛は、財産の分け前をもらって、遠い国に旅立ったけれども、そのままにさせたというところから始まっていました。息子は放蕩したのですが、彼が何もかも湯水のように果たすことは父には、目に見えていたことでしょう。そして、彼が豚の世話をしなければいけないほどに空腹になるような惨めな状態になることも、見えていたかもしれません。そして息子の状態がこう書いてあります。「彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。(ルカ 15:16)」彼は、自分の腹を満たすものをほしいと願っているのに、誰も与えようとしなかったのです。かつてのエルサレムと似ています。自分を慰めてほしいと願っていたのに、誰も見向きもしない、助けなかったのです。しかし、その涙と嘆きを経たからこそ、放蕩息子は我に返って、僕の様で父に受け入れられようとして、家に戻りました。

そしてイエス様が、父の愛のような愛を示されました。ペテロが三度、ご自身を否むことを言わ

れて、事実、彼が知らないと言った時に、主は少しだけペテロをご覧になりました。「ルカ 22:61-62 主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、「きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う。」と言われた主のおことばを思い出した。彼は、外に出て、激しく泣いた。」ペテロは激しく泣きました。この涙があったからこそ、ペテロは後に教会の指導者になることができました。もはや、自分の意欲や意志ではなく、神の御心によって、聖霊の力によってイエス様の証人として立つためであります。イエス様が行なわれたのは、ただ彼を見つめただけです。御言葉を思い起こさせるために必要なのはそれだけでした。

そしてラオデキヤにある教会に対して主は、語られます。「黙示 3:19-20 わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところには行って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」イエス様は、愛しているからこそ、懲らしめます。そして、熱心になって悔い改めている中で、戸の外で叩いている音を聞くことができます。そして、その時に初めて、主との親しい交わり、食事を取ることができるのです。

3A 身代わりに受けられた傷

1B 損なわれた御姿

ところで、廃墟となり、無残な姿になったエルサレムでした。哀歌では、1章12節からエレミヤがまるでエルサレムが自分自身であるかのように投影させて、「私」という言葉を使って語り始めます。少し読みますとこうなっています。「道行くみなの人よ。よく見よ。主が燃える怒りの日に私を悩まし、私をひどいめに会わされたこのような痛みがほかにあるかどうかを。主は高い所から火を送り、私の骨の中にまで送り込まれた。私の足もとに網を張り、私をうしろにのけぞらせ、私を荒れずさんだ女、終日、病んでいる女とされた。」このようにして、エレミヤはまるで自分自身がエルサレムに下る神の怒りを受けているようにして痛んでいます。

思えば、私たちの主イエス様が、まさにエルサレムと同一になってくださったのではないのでしょうか？主がエルサレムを見ておられた時、涙を流されました。「エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、言われた。「ルカ 19:41-44 おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」

しかし、主はその破壊をいわば、前もってご自分の体に受けられました。主は見るに堪えない、損なわれた姿となりました。ユダヤ人指導者は、この方を死刑に定め、こぶしで殴りました。主は、孤独にられました。近しい十二人のうちから、イスカリオテのユダによって裏切りを受けました。そして、他の弟子たちはイエス様を見捨てました。そして、イエス様がピラトの判断によって鞭打た

れます。続けざまの暴力によって、顔かたちが変わったほどです。「イザヤ 52:14 多くの者があなたを見て驚いたように、その顔だちは、そこなわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた。」この方は、彼らの、そして私たちの病を負って、私たちの痛みをになわれたのです。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられました。エレミヤが哀歌で嘆いていたこと、エルサレムを自ら自分のことのようにして、神の怒りを感じたように、イエス様は私たちに対する神の怒りを、ご自分の体に受けてくださったのです。

2B 避け所

そして、この方の打ち傷によって、私たちは癒されます。「イザヤ 53:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」イエスを自分のメシヤとして信じたユダヤ人たちは、罪の赦し、魂の救いを得ただけではありませんでした。エルサレム破壊からも免れることができました。主の命令にしたがって、ローマによってエルサレムが包囲された時に、エルサレムから逃げました。彼らは、ペラという町に避難することができたのです。これで、イエス様が泣かれたエルサレムの破壊を免れることができたのです。

私たちも、各々が、自分のために自分の姿を損なわれたイエス様のところに来ることができる選択があります。

これは実話ですが、チャック・スミス牧師がイスラエル旅行でしばしば雇っていた、ユダヤ人ガイドのことです。彼はとても優しい、人柄の良い人でした。エルサレム旧市街のヨッパ門の近くで、パレスチナ人が不審な動きをしていたそうです。そこにイスラエル兵の若者が何人かそばにいました。彼は、その男が自爆用のベルトをしていることをとっさに判断し、彼のところに飛んでいって、覆いかぶさったそうです。しかし、パレスチナ人は爆破したのです。そのガイドさんは、一命をとりとめました。そこにいたイスラエル兵は、もしそのガイドさんが人間の盾となっていなければ、必ず死んでいたのです。そして、そのガイドのところに見舞いに行きました。彼の顔は人間のような形は無くなっていました。その若者たちの顔から涙が流れました。そうです、その無残な姿によって、自分は今、生きているのだということです。

このことを主はしてくださったのです。あなたの罪が、あなたの行なった悪が、必ず神の怒りを招きます。しかし、イエス様はご自分の肉体でその怒りの全てを受けてくださいました。この方を受け入れてください。そして救われてください。



ゴルゴダとエレミヤの洞窟(1900年)²

² https://en.wikipedia.org/wiki/The_Garden_Tomb#/media/File:Skull_Hill_and_Jeremiah%27s_Grotto.jpg